

ロシアのマルクス主義者の闘争の目的

労働者階級の階級的自覚を発達させること

ロシアのマルクス主義者は、まさに従来の社会主義者の主観的方法を批判することからはじめた。彼らは、搾取の存在を確認して、それを非難すりに満足せずに、搾取を説明しようといふが、彼らは、ロシアの農民改革後の全歴史が大衆の零落と少数者の致富から成っていることをみとめ、全般的な技術的進歩と平行して小生産者にたいする大規模な収奪がおこなわれていることを観察し、そして、こういう対極的な動きは、商品経済が発展し強化しているところで、また、そのかぎりで発生し強化しつつあることをみとめて、彼らの当面しているものが、**必然的に**大衆の収奪と抑圧とを生み出すブルジョア的（資本主義的）社会経済組織であることを、結論せざるをえなかった。彼らの実践綱領はすでに直接にこれらの確信によって規定されていた。この綱領は、辺鄙な寒村から完備した最新式の工場にいたるまでの、ロシアの経済的現実の主要な内容をなしている、ブルジョア階級にたいするプロレタリアートのこの闘争、有産者階級にたいする無産者階級の闘争にくわわることには帰着するものであった。どのようにしてくわわることか？——これにたいする回答を彼らに暗示したのは、やはり現実そのものであった。資本主義は産業の主要部門を大規模機械制工業の段階にまでみちびいていった。こうして資本主義は生産を社会化することによって、新しい制度の物質的諸条件をつくりだし、そして、それと同時に、新しい社会的勢力、すなわち工場労働者、都市プロレタリアートの階級をつくりだした。ブルジョア的搾取は、その経済的本質からしてロシアの全勤労住民の搾取であるが、プロレタリア階級はこの同じブルジョア的搾取をこうむりながら、しかも自己の解放にとってとくに好都合な条件下におかれている。この階級は、まったく搾取のうえに構築されている古い社会とは、すでになんのつながりももたない。彼らの労働の諸条件と生活環境そのものが彼らを組織化し、彼らに物事を考えさせ、そして、政治闘争の舞台に登場する可能性をあたえる。社会民主主義者がその全注意と全希望をこの階級にむけ、その綱領をこの階級の階級的自覚の発達ということに帰着させ、その全活動をこの階級をたすけて現代の制度にたいする直接の政治闘争にたちあがらせることに、この闘争にロシアの全プロレタリアートを引き入れることに、そそいだのは、当然である。

第一巻 「人民の友」とはなにか P190~191

コメント

社会民主主義者はその全注意と全希望を労働者階級に向けなければならないこと、その綱領は労働者階級の階級的自覚の発達ということを目的として、その全活動をこの階級をたすけて、資本主義制度にたいするその廃絶のための政治闘争にたちあがらせること、この闘争に全労働者階級を引き入れること、そのことがマルクス主義者の闘争の目的である。